

ひーりんぐマガジンをご購読の先生方、こんにちは！ 前回は立方骨症候群の論文を紹介してメカニズムを復習しました。

◎足の怪我をしたアスリートの4%に立方骨症候群がみられる

◎プロのバレエダンサーの足の怪我における立方骨症候群の割合は17%というエビデンスも出ていてなかなか興味深い内容でした。

今回は確定診断のための疼痛誘発テストと立方骨由来の骨盤帯痛“上行チェーン障害”の診かたを勉強していきます。前号の復習もあるので手元に前号を準備して読みはじめてください。

1. 立方骨症候群の発生機序

ハイリスクなスポーツであるバレエダンサーは男女で機序が変わります。男性のバレエダンサーは足が回内しながら強いジャンプを反復するため、急性発症が主でした。女性のバレエダンサーは柔軟性を必要とする動作における人体構造への複数の微細損傷に起因するoveruse症候群が多くみられます(Marshall and Hamilton,1992)。

一方、その他の人の立方骨症候群は、足関節の内反捻挫と底屈損傷の合併症としても指摘されています(Jennings and Davies,2005)。内反捻挫は、最も一般的な運動傷害の1つであり、全ての傷害の38%から45%を占めています(Fallat et al.,1998)。これらの患者の最大40%に症状が残っている可能性があり、立方骨症候群が原因である可能性があります(Freeman,1965)。

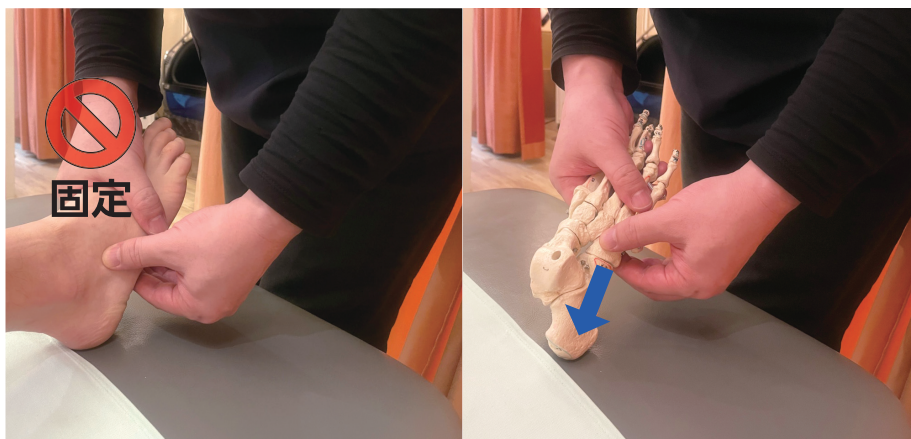
立方骨症候群は、中足根関節の踵立方関節部分の構造的な一致の軽微な破壊または亜脱臼として定義されます。立方骨の位置異常は、周囲の関節包、靭帯、および長腓骨筋腱を刺激します(Blakeslee and Morris,1987)。

内反捻挫後にテーピングをしてスターアップ(ステアアップ)が立方骨にかかるものすごく痛かったのを思い出します。理屈が分かると患者さんにも丁寧にテーピングができるようになりますね！

2. 立方骨症候群の疼痛誘発テスト(Blakeslee and Morris, 1987)

次の3つのうち、2項目以上疼痛再現で陽性。

写真 1 ① 圧迫テスト



徒手医学 基礎講座

Vol.25 疾患別問診術 立方骨症候群 (Cuboid syndrome)編2

荻窪リハビリスタジオ
水谷 哲也

水谷 哲也 | PROFILE

- ・柔道整復師
- ・日本臨床徒手医学協会理事
- ・日本ドイツ徒手医学会 / 認定マニュアルセラピスト
- ・日本クラシカルオステオパシー協会 / 認定会員('07~'10)
- ・メディックスボディバランスアカデミー講師
- ・NPO法人日本手技療法協会指導員

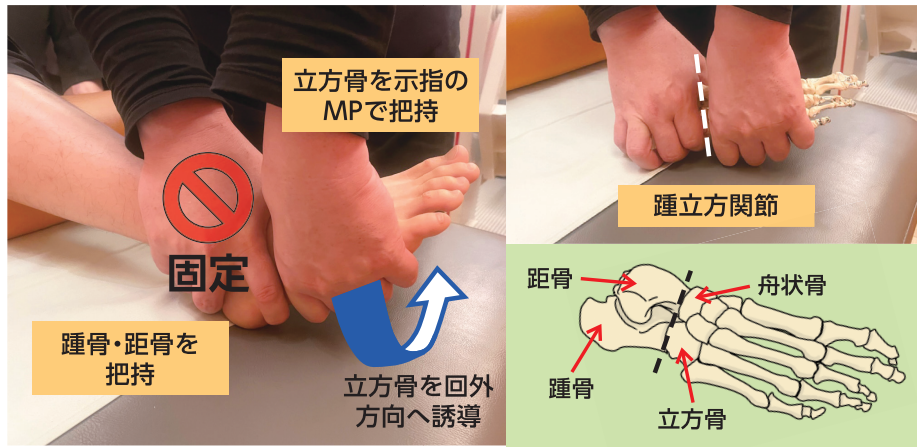
現在は荻窪リハビリスタジオにて脊柱疾患を専門に急性期、慢性疼痛の治療、オーダーメイドの運動療法や各種セラピスト向けの勉強会を随時開催している。

アシスタント
岩間 絢子
桑島 悠輔

写真 2 内転テスト



写真 3 回外テスト

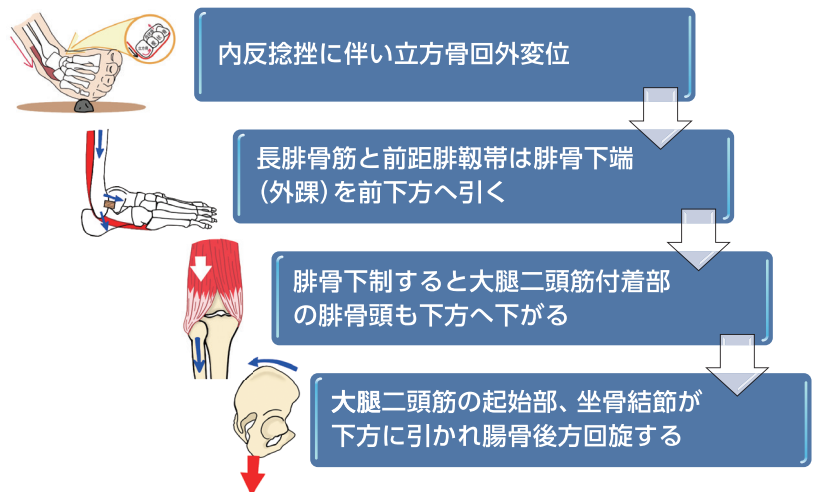


以上3つのテストは特別な準備もいらない簡単なテストなので、`荷重時足部外側が痛い、`と言って来院した患者には必ず行ってください。立方骨がブロッキングや変位を起こして痛みを呈している場合、超音波などは無意味です。手技・電療・物療はそれぞれ向き不向きがあるので自・他動運動、疼痛誘発テストなどで病態が確定してから治療法をチョイスするだけで治療成績も上がると思います。

3. 立方骨症候群による上行チェーン障害

捻挫した側の腸骨後方回旋の治療をしたが、1週間後にまた後方回旋して戻ってきた！ という患者に対し何を考えますか？ 機序は図1の通りです(前号の図4も参照して下さい)。

図 1 上行チェーン障害の発生機序



この病態が隠れていると毎回同じ治療をしてもその場だけよくなって次に来たときは元に戻っている、といったことになってしまいます。初診で来た患者の次回来院時が非常に大切なのは、1回目の評価が合っていたのか？ 治療や日常生活のアドバイスは間違っていなかったか？ の答え合わせが必須だからです。もし間違っていたら再評価をして治療法の再検討も必要になってきます。

4. 立方骨変位に対するMobilization

写真 4 立方骨変位に対するMobilization



① 内側から足部を把持、立方骨に母指を当てます。

② 対側の小指球を母指に乗せ、肘伸展位で背側に押します。

いかがでしたでしょうか？ 足部外側の痛みは比較的メジャーな症例なので参考にさせていただければ幸いです。

定例の勉強会が復活しました。引き続きリクエストや質問は info@ogikubo-rehabili.com までよろしくお願いいたします。

図：岩間絢子

参考文献

Marshall P., Hamilton W.G. (1992). Cuboid subluxation in ballet dancers. *American Journal of Sports Medicine* 20(2), 169-175.

Jennings and Davies (2005).

Fallat et al. (1998).

Freeman (1965).

Blakeslee T.J., Morris J.L. (1987) Cuboid syndrome and the significance of midtarsal joint stability. *Journal of the American Podiatry Medical Association* 77(12), 638-642.